

文学研究論集第47号 '17・9

研究論集委員会 受付日 二〇一七年四月二十一日

承認日 二〇一七年五月二十二日

## 志賀直哉「母の死と新しい母」論

——血による「私」の差異化——

A Study on SHIGA Naoya's "The  
Death of my Mother and the new  
Mother"

博士後期課程 日本文学専攻 二〇一七年度入学

柳 澤 広 識

YANAGISAWA Hironori

### 【論文要旨】

「祖母の為に」(『白樺』、明治四十五年一月)を嚆矢として、志賀直哉は家族を創作の対象とした小説を次々に発表していく。本稿で扱う「母の死と新しい母」(『朱鸞』、明治四十五年二月)はそのような自伝的小説群のひとつとして発表された。「憶ひ出した事」(『白樺』、明治四十五年二月)と同時に発表された作品であり、両作を通じて直哉は「私」を差異化することを意図していたように思われる。

「大津順吉」(『中央公論』、大正元年九月)をひとつの区切りと考える

とき、「母の死と新しい母」はどのように位置付けることができるのだろうか。本稿では主に次の二点に関して考察を行う。ひとつは「創作余談」(『改造』、昭和三年七月)の内容を疑い、草稿との比較を通して「母の死と新しい母」の作品構造を分析することである。二点目は、他の妹弟と血が異なることが語られていることに着目し、直哉にとっての遺伝の問題を検討することである。「憶ひ出した事」との距離にも留意しつつ、「母の死と新しい母」を自伝的小説として捉え、その後の志賀直哉文学で重視される家族の問題に焦点を当ててみたい。それ故に、日記や未定稿、ノートなど周辺の資料も活用していくことにする。

【キーワード】 志賀直哉、母、創作余談、遺伝、自伝的小説

### はじめに

志賀直哉は、「祖母の為に」(『白樺』、明治四十五年一月)の発表後、連続して家族を題材にした小説を書いていく。「祖母の為に」では、「十三で実母を失った私は其以前からも殆ど祖母の手だけで育てられた」と自身の生育事情が述べられているが、その「十三で実母を失った」ことを描いた小説が、「母の死と新しい母」である。明治四十五年二月、北原白秋が主宰する雑誌『朱鸞』に発表された。直哉にとっては、初めて『白樺』以外の雑誌に掲載された作品である。

「母の死と新しい母」(以下、本作とする)が発表された明治四十五年二月に、直哉はもうひとつ作品を発表している。それは「憶ひ出した事」

であり、こちらは『白樺』第三卷第二号に発表された。この同時発表は重視されるべきである。なぜならば、両作にはそれぞれを補完するような記述があり、それは本作において次のような場面に指摘できる。

かりつけの医者は無愛想な人だが、親切で、其上自家中の人の体を呑み込んで居ると祖母などは信用しきつて居た。所が其二年程前、旧藩主の気の違つた殿様を毒殺したと云ふ嫌疑で私の祖父等五六人と共に二ヶ月半此人も未決監に入れられた。(三)

(傍線引用者、以下同。)

ここでは、「憶ひ出した事」の内容が語られており、そこには両作を結びつけないという直哉の意図が感じられる。「祖父」が「未決監に入れられた」ことは、「憶ひ出した事」の内容を想定しなくてはいささか唐突である。それ故に、「祖母の為に」の後に「憶ひ出した事」と同時に発表されたということは重要だろうと思われる。

同時代評をみても、二つの作品を並べて評価が下されている。そこでは本作の方がより好評を得ている。たとえば、「二月の小説(月旦)」『新小説』、明治四十五年三月)においては、「一体自分はこの二篇(引用者注)本作と「憶ひ出した事」の中では「母の死と新しい母」の方を余計に面白く思つた」と述べられている。また、加能作次郎も「二月文壇評」(『早稲田文学』、明治四十五年三月)において、「朱鸞」に出て居た志賀氏の「母の死と新しい母」は、「思ひ出した事」よりはずつといふ作であつた。初めの方の母の死ぬあたりは、簡樸な飾らぬ筆付

で、よく其の光景を現はして居る」と本作を評価している。のちに「和解」(『黒潮』、大正六年十月)を酷評した近松秋江も本作は高く評価しており、「書齋偶語(下)」(『時事新報』、明治四十五年二月二十八日)で「スラリとした筆致が好ましい」とし、「印象の明らかな筆である」と述べている。池内輝雄<sup>(2)</sup>は、この近松秋江の時評について、「志賀直哉が、『時事新報』紙上での署名入り原稿において、はじめて名ざしで取り上げられた」ものだと指摘しており、そのことから本作が志賀直哉文学のなかで注目を集めた小説であることがわかる。

直哉自身も、本作を高く評価している。それは「創作余談」(『改造』、昭和三年七月)で次のように言及されていることから窺える。

「母の死と新しい母」少年時代の追憶をありのままに書いた。一ト晩で素直に書けた。小説中の自分がセンチメンタルでありながら、書き方はセンチメンタルにならなかつた。此点を好んである。他人から自身の作品中何を好むかと訊かれた場合、私はよく此短編をあげた。苦勞して書いたものには苦勞しただけの長所があり、素直な気持でスラ／＼と書けたものには又さういふいい所がある。作者自身では多くの場合後者の方に愛着を感じるらしい。

ここで「一ト晩で素直に書けた」とあるが、その真偽は疑わしいものがある。詳細な考察は次節で行うが、日記をみるかぎり「一ト晩」で書いたようには思えない。「創作余談」の言及自体を慎重に扱う必要がある。

次に先行研究を確認すると、父子対立の枠組みから読み解いた論として須藤松雄および池内輝雄のものがある。須藤は、「私」が「父」の行動に「いたたまれない気持」を感じている場面から「父に対する批判、抵抗」を読んでいる。そして、それを「自我貫徹する方式の高潮に達した大正元年の作者に基づく」としている。また、池内は、「私」と「父」が「同質の存在であること」を読み取り、その上で「父」が本作から「消去」されていることを指摘している。さらに、「文学作品という活字による仕掛けのなかで巧妙に仕組まれた〈親殺し〉であったかもしれない」とまで述べている。

本作と関連する作品である「母の死と足袋の記憶」（初出未詳。大正六年六月発行の新進作家叢書『大津順吉』の末尾に収録）との比較を行ったものもある。田中榮一の論である。田中は、「母の死と足袋の記憶」に対して、本作では「私」を描けてはいるが「母」は描けていないとする。また、本作を「志賀直哉から切り離して読む」ということを目的として論じているものとして、長江弘一の論がある。長江は、本作から思春期独特の義母に対する想いや父に対する敵対心を読み解いている。

「実母の追放と新たな母子神話の創造」を本作から読み解いたのは、富澤成實である。富澤は、本作によって直哉が「実母を意図的に抹消しようとした」とし、それは義母との新しい神話を形成するためであったとする。その裏には、直哉自身が家長になりたい意識があると指摘されている。実母の「出産能力という点に関して」の「未熟さ」が、義母の「まるで精巧な機械のように次々と子を出産することを叙述した末尾」と対照的に描かれることからそのような結論を導いている。

最新の先行研究としては、唐澤聖月<sup>(8)</sup>の論がある。唐澤は、より「母」そのものに着目して読解を行っており、「未定稿69　せめふざけ」の「(十一) 夢」を引用し、二人の母が同席してはならない存在であったことを示す。さらに、そこから「水のイメージ」が本作を覆っていることを指摘している。

以上の先行研究をみたとき、父子対立から「母」への着目といった流れが想定される。父子対立は直哉の経歴に頼りすぎたものとして批判されており、近年では作品からより詳細に「母」を読み取る試みがなされている。しかし、その際に見落とされたものがあるのではないか。

そもそも「母の死」とは誰にとつての「母の死」なのか。「新しい母」とは誰にとつて「新しい」のか。言うまでもなく「私」にとつて、である。本作の中心にいる存在は、実母銀でもなく「新しい母」でもない。「私」がその中心にいる。その前提を改めて確認した上で本作を読解すべきであろう。

本稿では、主に次の二点について考察する。

まず、「創作余談」を疑い、本作の構成が巧みに計算されていることを指摘する。具体的には、「一」から「七」まで「私」の気分が下弦を描くように物語が展開されていることを示す。また「草稿21」〔母の死と新しい母〕（以下、「草稿21」と表記。）との比較を通して、本作が成立するまでには慎重に微調整が行われたことを明らかにする。本作は、とても「一ト晩」で「スラ／＼と書けた」作品とは考えられない。

次に、他の妹弟とは血が異なる存在として「私」が差異化されている様相を考察する。義母の多産性は、間接的に「私」の稀少価値を高めて

いるのである。さらに、本作では義母浩の経歴が意図的に隠蔽されている可能性がある。そこから直哉が如何に「私」を特別な存在として語り、どのような自己像を築こうとしていたのかを探りたい。先述したように、「憶ひ出した事」との関係も重要であるが、まずはそれぞれの作品を具体的に考察したい。「憶ひ出した事」については別稿の用意があるので、本稿では「母の死と新しい母」の詳細な検討を行う。

## 一、「創作余談」という創作

明治四十五年一月の志賀直哉日記をみると、「創作余談」の言及に対して疑問が生じる。明治四十五年一月八日には「二人の母」を「母の死と新しい母」と改題して推敲を終った」とあり、十九日には「帰つて「母の死と新しい母」の清書をする」と記されている。二十日には「午后清書を済し（「母の死と新しい母」の）／夜それを持つて白秋訪問不在、疲労甚だしく、肩凝る」とあるので、とても「一ト晩」で「スラ／＼」と書いたものではないことがわかる。<sup>(9)</sup>「創作余談」は昭和三年に発表されているので、先に確認した同時代評の影響を受けている可能性もある。直哉が「創作余談」を使って、自己に対するイメージを誘導していることも考えなくてはならないのである。「創作余談」に関する先行研究としては、亀井千明<sup>(10)</sup>のものがある。亀井は「創作余談」に対して、「過去に書いた作品に対して、志賀が正確な記憶を持ち得ているかどうかは非常に疑わしい」とし、「自作解説という作者が作品に対して発言出来る場を利用しつつ、読者たちの作品に対する読みを誘導するかのような、志賀の作家としての〈戦略〉とも受け取れる」とも述べている。

また、永井善久<sup>(11)</sup>は亀井の論を参照した上で、「創作余談」に「志賀自身の意図の有無に拘らず、時代状況の変化によって生じたある力学が介在していたのではないか」とも述べている。亀井および永井の指摘も踏まえた上で、本稿では「創作余談」をありのままに受け取らない立場をとる。

本作には巧妙な計算が仕掛けられているとしたい。特に、年齢と構成にその計算が指摘できるように思われる。「草稿21」と比較すると、登場人物の年齢の相違がみられる。本作では、「私」は「十三」、「父」は「四十三」となっている。直哉の経歴と合わせて考えると、これは数え年である。この年齢は草稿では、「九十二才の自分」、「四十二才の父」となっており、満年齢であったことがわかる。なぜ、年齢を数え年に統一したのか。それは、「母」の亡くなった年齢を「三十三」としたかったためだと考えられる。実母銀は、文久三年（一八六三年）九月十五日生れであり、明治二十八年（一八九五年）八月三十日に歿しているので、満年齢では三十二歳、数え年では三十三歳で亡くなっている。「三十三」という数字に直哉は拘っているのであり、後年の作品、たとえば「実母の手紙」（『文藝春秋』、昭和二十四年一月）でも実母は「三十三で亡くなった」と記されているのである。

数え年の三十三歳は、女性にとっては厄年、さらには大厄である。直哉の周辺、たとえば里見弴も厄年に拘った小説を書いている。里見弴は「手紙」（『白樺』、大正元年十二月）において以下のように書いている。<sup>(12)</sup>

旧弊な「厄年」と云ふやうな考にも彼は割合に心の自由を失ふ方

だった。「何しろ二十五と云へば前厄だからネ。お互に今年は氣をつけなくつちや」こんなことを同じ齡の友達同士云ひ合ふのにも、彼のはまんざら言葉の興味からばかりではなかった。

「手紙」ではその後も主人公「昌造」が「厄年」であることが強調されており、連想から女性との關係に話が移っていく。里見弴は厄年を「旧弊な」考えたと言っているが、直哉はその「旧弊な」考えに影響されていたのかもしれない。「三十三」という年齢への拘りは、それ以外にも考えられる。「草稿22 第三篇「大津順吉 自転車」」には以下のような記述がある。

或晩、赤坂病院の説教会へ行くと、

「エホバは父、キリストは母」かういふ説教があつた。四十四五の色の黒い瘦せた伝導師で、今思へば巧みな説教をするといふ性の人ではなかったかと思ふ。

エホバを厳格な父として、キリストの柔かい愛情の面を説いて、此母によつて厳格な父に罪をわびて貰はねばならぬといふ意味であつた。

自分には息がつまるやうな興奮が起つて来た。満十二の夏に実母を失つた自分には、母としてのキリストが何よりも近かく自分に近づいた。

ここには、「母としてのキリスト」が語られているが、実母銀の亡く

なつた年齢、「三十三」にもキリスト教の影響が見られるのではないか。

また、「草稿21」では、「新しい母は二十三才で自分より十一才の年長であつた」と、義母の年齢が記されていたが、本作では削除されている。これは、意図的にその年齢を伏せることによって、より「新しい母」を若く見せるための措置だと考えられる。具体的な年齢を示さないことで、「新しい母」の初々しさを描いているのである。直哉は義母との距離を非常に慎重に扱っている。

構成にも、十分に注意が払われていることがわかる。「一」から「三」にかけての三章では、実母の懐妊から死までが描かれている。本文では次のようにある。

午後の水泳が済んで、皆で騒いで居ると小使が祖父からの手紙を持って来た。私は遊びを離れて独り本堂の縁に出て、立つたままそれを展いて見た。中に、母が懐妊したやうだと云ふ知らせがあつた。(一)

帰ると、土産を持つて直ぐ母の部屋へ行つた。母は寝て居た。悪阻だと云ふ事で、元氣のない顔をして居た。(二)

少時すると不意に代診は身を起した。——母はたうとう死んで了つた。(三)

本文を続けて引用したが、ここでは、期待(一)から不安(二)を経

て、悲哀(三)へと下降していく「私」が描かれていると言える。「四」は、中心にある章であるが、そこでは、「母は明治二十八年八月三十日に三十三で死んだ。下谷の御成道に生れて、名をお銀と云った」とあり、実母の名が記されている。実母を埋葬する際に、火葬ではなく、土葬として埋めている場面も、深さという観点からは重要だろうと思われる。気分が下降していき、「四」では地下へと降りる実母が描かれているのである。

「五」以降の章を気分注目して読解すると、次の場面が重要である。

——実母を失った当時は私は毎日泣いて居た。——後年義太夫で「泣いてばかり居たわいな」といふ文句を聴き当時の自分を憶ひ出した程によく泣いた。兎に角、生れて初めて起った「取りかへしのつかぬ事」だったのである。よく湯で祖母と二人で泣いた。然し私は百日過ぎない内にもう新しい母を心から待ち焦れるやうになつて居た。(五)

一日一日を非常に待遠しがった末に、漸く当日が来た。赤坂の八百勘で式も披露もあつた。(六)

皆が新しい母を讃めた。それが私には愉快だった。そして此時はもう実母の死も純然たる過去に送り込まれて了つた。——少くともそんな気がして来た。祖母も死んだ母の事を決して云はなくなつた。私も決してそれを口に出さなかつた。祖母と二人だけになつて

も其話は決してしなくなつた。(七)

「四」を軸として、「一」から「三」を前半部、「五」から「七」を後半部とすれば、後半部では、上昇していく気分が描かれていることがわかる。「五」で実母の死を悲しみつつも、新しい母への期待と不安が語られる。「六」では、「植込みの石を伝つて還つて来る」ような陽気な「私」がみられる。「七」に至ると、実母の死は「純然たる過去」として扱われているのである。

以上のように、本作では「一」から「七」にかけて、下弦を描くような構成が指摘できる。志賀直哉文学にとって「或る朝」(『中央文学』、大正七年三月)にみられるような気分の変化(不和から調和へ)は特徴的であるが、本作においても巧みに構成された気分が読み取れるのではない。実母の懐妊ではじまり、「此正月」に義母が出産することで本作は閉じられる。その懐妊から出産もまた巧みに仕組まれた構成だったと考えられる。

## 二、「私」の特異性

先行研究では、父への反抗という視点がある。また義母との新しい神話という読解もあり、さらに「母」への想いが描かれているという指摘もあった。それぞれに重要な指摘ではあるが、本作では「私」の特異性が強調されているのではない。中心にいる「私」がどのように語られているのかを重視したい。

翌々年英子が生れた。

又二年して直三が生れた。

又二年して淑子が生れた。これは今年十二になる。祖母のペットで、祖母と同じやうに色の浅黒い児である。

又二年して隆子が生れた。又二年して女の子が死んで生れた。隆子はその乳までも飲んで母のペットになつて居た。

それから三年して、眼の大きい昌子が生れた。昌子が三つと二ヶ月になつた此正月に又女の子が生れた。(七)

右に引用したように、本文末尾では英子から禄子の誕生まで、一気に妹弟が生まれる様子が語られる。ここにおいて、義母の出産能力の高さが示されていることは間違いないであろう。多産の「新しい母」が強調され、その反面、実母銀の出産能力の低さが目立つ。しかし、だからこそ「私」は特別なのである。「私」の「兄」の「直行」は死に、三番目の子供も実母銀と共に死ぬ。実母銀から生まれ育ったのは「私」だけなのである。本作執筆前であるが、そのことを直哉も意識している。それは、明治四十一年四月二十一日の有島壬生馬宛書簡の内容に明らかである。「一家の不和の源因」について直哉が書いた文章である。

生母は死むだ、兄が死むで余が生れてから生母は一人の兄弟も生まなかつた。ダカラ血に於て直接に関係のあるものは、世界に一人、父ばかりである、其所に一種解らない情があるやうだ。

ここでは、父直温に対する想いへと話が移っていくのであるが、そこで実母銀について「一人の兄弟も生まなかつた」と述べていることは注意すべきである。「血に於て直接に関係のあるもの」に直哉が拘っていることが窺われる。作品に話を戻せば、いくら妹弟が生まれても、それは「新しい母」の子供であり、「母」の子供ではない。妹弟の誕生は、「新しい母」が老いていく過程、年月の経過を示すために述べられているだけである。少なくとも、この列挙から妹弟を描写の対象として重視しているとは判断できない。さらに、「銀」が臨終の場面で「母の母」を拒絶する次の場面は示唆的である。

次に、根岸のお婆さんと云ふ、母の母が私のしたやうに顔を出して、自分で、

「私は？」と云つて見た。

母は又眸を集めて見て居たが、急に顔を顰めて、

「ああ、いや／＼、そんな汚いお婆さんは……」

と眼をつぶつて了つた。(二)

ここで、「母」は「母の母」を拒否する。「母」は娘ではなく、「母」のまま死ぬのである。「母の死と足袋の記憶」においても、「私」が「色が黒くても、鼻が屈つて居ても、丈夫でさへあればいい」と言われる場面と同様に、「母の母」が「ああ、いや／＼、そんなきたないお婆さんは」と言われる場面が繰り返して語られている。「根岸のお婆さん」とは、実母銀の母、佐本ふくのことである。<sup>(13)</sup> 佐本ふくは、天保元年（一八三〇

年)二月八日生れ、この時(明治二十八年)は数え年で六十七歳である。「実母の手紙」においては、佐本ふくについて次のように述べられている。

私は実母の実家と段々疎遠になった。実母の実家では父と私との不和を義母が蔭で糸を引いてゐる為めだと解してゐた。伊勢亀山の藩士で、侍といふ階級ではあつたが、江戸時代から東京に住み、家が根岸で、悪い意味での下町風の所があり、私の家や義母の実家とは家の空気はかなり異つてゐた。気持が低調であつた。義母に就いて云ふ事も根拠があるのではなく、芝居や通俗小説からの連想で、さう思ふらしく、私が絶対にそんな事はないといつても、「それはお前が知らないのだ」と云つた。

佐本ふくと直哉が、義母浩をめぐる疎遠になったことがわかる。また、後に佐本ふくが「御嶽講といふ安価な宗教」に金を注ぎ込むようになり、さらに疎遠になる。本作においては、「母」は最後まで「母」であり、それは「私」にとっての「母」なのである。唐澤は、この「母の母」という言葉に着目し、「私」や妹弟に「母」がいるように、その「母」(達)にもまた「母」(達)がいる。実母と義母二人のみならず、生命の根源としての母が描かれているのである」と述べている。<sup>(14)</sup>が、「母の母」という言葉が使われていることよりも、むしろ「祖母」という言葉が使われていないことの方に着目したい。母方の「祖母」という言い方を直哉は避けているのではないか。「祖母」という表記は、留女

のためにだけ使用されたと考えられるのである。

また、本作では、「新しい母」が、「私」にとってより「新しい」存在として強調されているとも考えられる。義母浩は、直温と同じく再婚であつた。そして前夫との間に「秀子」という娘もいたのである。志賀直三の『阿呆伝』(新制社、一九五八年一月)に次のような記述がある。

後妻に入つたわたしの母(引用者注＝浩)も再婚だつたから、輿入れの日、そのまま泊り込む田舎から出て来た客もあつたりして、母は何かと忙しく立働いていた。

さらに、秀子が義母浩の元に訪ねてきたことも、直三は語っている。

わたしが幼稚舎五、六年の頃だつたと思うが、若い娘が母を訪ねて来た。その人は、母が山形に残して来た母の娘さんだつたのだ。その折の前後の事情をわたしは知るよしもないが、二人は玄関脇の一室を締め切つて、何か声をひそめて話し合つていた。話の合間合間に二人は声に出して泣き合い、時折りは母の叱り声も聞こえて来るのだつた。

本作で「若くて美しかった母」として語られる「新しい母」は、直哉によって意図的に新しさを強調されていることがわかる。再婚であることは敢えて語られてはいない。むしろ、義母浩への配慮もあつたであろう。しかし、結果として「私」の「新しい母」が、新しさを強調して語



られていることには変わらない。

「暗夜行路」(『改造』、大正十年一月から昭和十二年四月)を引き合いに出すまでもなく、志賀直哉文学において、遺伝というテーマは重要である。本作では血が異なる「私」が語られているのであるが、直哉は遺伝についてどのように考えていたのか。ここでは、主に実母銀からの遺伝に絞って考察したい。というのも、「私」が血によって差異化されているのであるが、直哉は佐本家系の遺伝を拒否していたようにも思えるからである。たとえば、「身辺のこと」(『新潮』、昭和二十一年十二月)の「意地悪」には以下のようにある。

実母の実家は伊勢亀山の藩士で、私が覚えてからは根岸の旧藩邸の近くに任んでゐたが、江戸時代から下谷にゐて、下町風な所があり、母の弟であるその頃の当主——つまり私の叔父であるが、此人などは如何にも敗残の江戸っ子まる出しの人物だった。私の家とはさういふ意味で全然空気が異ひ、私は母の実家を好まず、殊に叔父の軽佻な、意志の弱さうな人物には常に軽侮の念を持つてゐた。祖母はそれを知つてゐて、私に何か軽佻な行ひがあると、叱る代りに、「矢張り血筋は争はれないものだ。どこか似てゐる」と嘆声を漏らすのだ。私にはこれが実に不愉快だった。

ここから、佐本家に対して直哉があまり好意を抱いていなかったことがわかる。また、本作執筆と比較的近い時期に書かれたと推定される「ノート12」(明治四十五年・大正二年と推定されている)をみると、遺

伝について興味深い記述がある。

彼は自分の下等な素質は総て父からの不可抗な遺伝のやうに思はれた。彼はその醜さに堪えられない心持をしながら、矢張り下等な事をする事があつた。又彼は自分でもいふと思ふ素質の幾分は何となく祖父からの遺伝のやうに思はれた、弱い素質は生母からの遺伝のやうに思はれた。彼の母は彼の推察によれば、彼の父からカナリ奴隷に視され、イヂメられてゐたらしい、母は遂にニンシンからツワリになりそれが余病を惹き起して死んで了つた。その時彼の父は涙を少しもこぼさなかつた。而して百日しない内に父は結婚した。

重視すべきは、自身の「素質」をいくつかに分けて、それぞれを父や祖父や母から受け継いでいると直哉が考えていることである。父から遺伝した「下等な素質」とは何か。おそらくは性欲の強さかと思われる。後半に述べられていることは本作に直接つながるため、この「ノート12」の記述は看過できない。「生母からの遺伝」を「弱い性質」としている点からも、実母銀から生れたのは直哉だけであるが、佐本家からの遺伝に関してはあまり好意的に受け入れていなかったと考えられる。「ノート12」の引用した部分には、明らかに父への反抗心が認められるが、その裏にある「生母からの遺伝」も看過できない。

直哉は、自身が実母銀から生れたという稀少性を本作で示しているのであるが、それが実母からの遺伝を肯定しているとするには早計である。本稿での考察に遺伝の問題を絡める際には、慎重に扱うべきである。

## おわりに

これまでの考察を整理すると、まず「創作余談」の言及が事実と異なることを指摘した。それによって、本作の構成や年齢の表記に巧妙な計算が働いていることを示した。「創作余談」に拘る理由は、仮に本作が「素直な気持ちでスラ／＼と書けた」作品である場合、「私」の差異化が、意図的なものであると判断できないからである。「創作余談」が疑わしいことは、直哉が「私」を戦略的に語っていることの証明に直結する。

先行研究では「父」や「母」が着目されているが、本稿では「私」に焦点を当てた。「母の死」および「新しい母」によって、「私」が家族のなかで特異な位置を占めていることが語られているのではないか。後年の作品である「白い線」「世界」(昭和三十一年三月)において、直哉は本作について再度言及する。そこでは以下のように述べられている。

私は二十九歳の時、「母の死と新しい母」を書いて、自分の喜びは書いたが、母の喜びを書く事は出来なかつた。本統にそれが察しられなかつたのである。今、自分の娘達が、自分の子供を叱つたり、可愛がつたりしてゐるのを見てゐると、私はその出来なかつた母の淋しい気持ちを察し、堪らなく哀想になる。

後年の直哉は本作を「本統の事がよく分らずに小説にしている」作品だと自己評価を下している。ここには「母の喜びを書くことは出来なかつた」とあるが、それは本稿で考察した「私」が中心的にいることにつ

ながる。「新しい母」が次々に新しい生命を産む末尾は、「銀」が「私」だけを産んだことを強調しているのである。また、「母の母」という表現は、逆説的な方法で「祖母」の重要性を浮き上がらせる。留女のみが「祖母」と呼べる存在であり、そこには父方、母方という区別が入り込む余地はないのである。

松井貴子<sup>(15)</sup>は、直哉にとつての「母親」という役割を祖母、実母、義母が分担していることに着目している。祖母、実母、義母それぞれを「生理」「慕情」「知」と捉え、直哉のなかでは「母親」像が統合されることなく分裂したままであると述べている。「ノート12」を参照すると、直哉の実母に対する慕情は、父への不和感情の反動として機能していたようにも思われる。一節で確認したように、実母銀が亡くなった「三十三」という年齢に直哉は拘った。大正四年二月二十日、自身が三十三歳になる誕生日に勘解由小路康と入籍したことも実母への慕情の現われだと考えられる。<sup>(16)</sup>

本作と同時に発表された「憶ひ出した事」では、祖父直道が拘留された、いわゆる相馬事件が回想されている。直哉は「内村鑑三先生の憶ひ出」(『婦人公論』、昭和十六年三月)において、「私が影響を受けた人々を数へるとすれば師としては内村鑑三先生、友としては武者小路実篤、身内では私が二十四歳の時、八十歳で亡くなった祖父志賀直道を挙げるのが一番気持ちにぴたりする」と述べている。祖父直道は直哉に多大なる影響を与えた人物であるが、回想のなかで直哉は祖父につながる家長として「私」を語っている。「祖母の為に」以降、直哉は家族を創作の題材として前面に打ち出すのであるが、「憶ひ出した事」および本作執

筆直前の日記、明治四十五年一月三日には次のように書いている。

友達をモデルにして書けば不快な事が起る。然し今自分に問題として一番痛切な事は友達関係である。作する場合安値な悪意を示す事をつゝしめば、自分がかまわなと思うてゐる。自分は自分の作物を友達以上に愛さなければならぬと思ふし、又愛してもゐる。然し友達に迷惑をかけるという事は快くない。忠実になれば多少は迷惑をかける事があるかも知れぬ。然しそれはその作を発表する場合の話である。自分には作物を推敲出来る、それを信じて自分は「青木と志賀及びその周囲」を思ふ存分に書かうと思ふ。

「未定稿<sup>129</sup> 或る旅行記 青木と志賀と、及び其の周囲。」がここで語られているが、それをもとにした作品、「廿代一面」が発表されるのは執筆から十年以上経過した大正十二年一月のことである。友人よりも、家族を創作の対象とした小説が積極的に発表されていくことが、その後の志賀直哉文学に決定的な影響を与えたと考えられる。<sup>(17)</sup>

家族を語ることを通じて、直哉は自身に対する特定のイメージを創り上げていったのではないか。そのイメージとは、自身が家族のなかで特異な位置を占めていたというものである。実母銀から生れた稀少性は特異性につながり、さらには自身の孤立にも結びつくように思われる。本作では、末尾に至って執筆している現在（明治四十五年一月）に時間が近づいていくのであるが、ここからは現在の自身を意味づける契機として母の死および新しい母の登場が扱われていることがわかる。本作およ

び「憶ひ出した事」から、直哉が巧みに方法を使い分けることによって、また作品同士を積極的に結びつけることによって、「私」のイメージを創り上げていくことがわかるのである。

#### (注)

- (1) 近松秋江は「文芸時事 下」(『読売新聞』、一九一八・十・二十五)において直哉の「和解」を「何の事だい、笑はせやがある!!不和が聞いて呆れらあ、和解は初鼻から出来てゐる。」酷評した。それに対して直哉は、「未定稿<sup>160</sup>」に秋江を痛烈に批判する文章を書いている。
- (2) 池内輝雄『志賀直哉の領域』(有精堂出版、一九九〇・八)に収録されている「時事新報」に見る初期志賀直哉と白樺派の作家たち」を参照。
- (3) 須藤松雄『増訂版 志賀直哉の文学』(桜楓社、一九六三・三)。
- (4) 池内輝雄『外なる敵、内なる敵——志賀直哉「母の死と新しい母」——』(『国文学 解釈と鑑賞』、二〇〇四・四)。
- (5) 田中榮一「志賀直哉の「母の死と新しい母」と「母の死と足袋の記憶」」(『島大国文』、一九八〇・九)。
- (6) 長江弘一「志賀直哉「母の死と新しい母」の可能性——作品は作者を離れる——」(『富大比較文学』、二〇〇八・十二)。
- (7) 富澤成實「母の死と新しい母」のたくらみ——実母の追放と新たな母子神話の創造——」(『日本文学』、一九九四・一)。
- (8) 唐澤聖月「志賀直哉文学における母の側面——「母の死と新しい母」論——」(『文学研究論集』第三十四号、二〇一一・二)。
- (9) 菊利「志賀直哉全集」第一巻(岩波書店、一九七三・五)の後記においても「部分的にかなりな語句修正が行われて、「母の死と新しい母」になつていったことがわかる」とある。
- (10) 亀井千明「戦略」となった自作解説——志賀直哉「創作余談」「続創作余談」「続々創作余談」——」(『近代文学試論』、二〇〇三・十二)。
- (11) 永井善久『志賀直哉』の軌跡 メディアにおける作家表象(森話社、二〇一四・七)の「第三章〈志賀直哉〉・昭和三年——「赤西蠟太」への

恋」を参照。

- (12) 引用は『復刻版』白樺 第三卷第十二号（岩波ブックセンター、一九八八・三）に拠る。その際、適宜旧字を新字に改めた。なお、里見弴には『雑記帖』（かまくら春秋社、一九八五・三）収録の未発表原稿「小説二十五歳まで」という作品があるが、これも厄年が意識されたタイトルであろう。

- (13) 佐本家の家系に関しては、川村渡『伊勢亀山・志賀直哉の文学——母方佐本家の人々——』（三重県郷土資料刊行会、一九八五・二）および桜井勝美『志賀直哉の原像』（宝文館出版、一九七六・十二）に詳しい。

- (14) 唐澤聖月、前掲論文。

- (15) 松井貴子「志賀直哉の「母親達」」（『比較文学・文化論集』、一九九四・十一）。

- (16) 大正四年に、直哉の実母への慕情が一層高まっていることは、拙稿「志賀直哉「焚火」論——猪谷六合雄「母が迎えに出す」との比較を中心に——」（『大正文学論叢』第二号、二〇一六・二）で指摘した。

- (17) このことは下岡友加も『志賀直哉の方法』（笠間書院、二〇〇七・二）の第四部・第一章「モデルの不服」にみる小説観——「暗夜行路草稿20」の問題——」で言及している。友人をモデルにすることの逡巡は「暗夜行路」の成立にも大きく影響しているといえよう。

※本文およびその他志賀直哉の小説・随筆等に関する引用はすべて『志賀直哉全集』（全二十二巻・補巻全六巻、岩波書店、一九九八・十二～二〇〇二・三）に拠る。その際、ルビはすべて省略した。また同時代評の引用に際しては適宜旧字を新字に改めた。